

「黄色いレインコート」

「どうでしょう」

「どうでしょう」

娘さんは勇気を振り絞って

「レインコートを貸して下さい」と

言っているのに三蔵爺さんはじれったい

「どうでしょう」としか言わない

貸すとも貸さないとも言わない

自転車を降りて来た娘さんの

髪はしとしと濡れている

雫が前髪から滴っている

唇が濡れている

半分泣き顔になっている

牛小屋の牛が鳴いた

三蔵さんは牛に草を喰わせている

牛小屋の隣の藁小屋に

そのレインコートは吊されている

よれよれした黄色いレインコートだ

下ろしてきて貸してやればいいのに

三蔵さんは

「どうしよう」としか言わない

娘さんは郵便局に勤めている

時間がない

しびれをきらしたのだろう

娘さんはまた自転車に跨がった

サドルもびっしりになっている

そしてとうとう雨の中に消えて行った

それからなのだ

三蔵さんが泣き出したのは

どうして貸してあげなかったのか

自分に問うて問うばかりだったのだ

ほんとうは

郵便局に努めているその娘さんと

同年代の娘さんを急に亡くしたのだ

それでその亡くなった娘さんが

あの世から帰って来たみたいで

嬉しくなつて

そこにいつまでも留めておきたいと

そう思って身動きがとれなかったのだ

雨の中に消えて行つた娘さんは

それを知らない

そこにあるレインコートを

貸してあげないのは冷淡だったが

爺さんの胸は火のように熱かったのだ

牛小屋の隣の藁小屋に

吊されていたレインコートは

亡くなった娘さんの愛用だったのだ

ひとはほんとうのことは明かさない

ほんとうのことは明かさない

ほんとうのことは

そこにじつとして動かないのだ

牛小屋の隣りに吊されたままなのだ